

校長の想い2月

はがきという日本の文化

年が明けて、早いもので1カ月が過ぎました。

昔から「1月に行く、2月は逃げる、3月は去る」と言って、時の経つのが早い3学期を迎えました。私自身の島での生活も三宅島で5年、神津島で4年とこの3月で9年間になります。お正月も9年間島で迎えています。

毎年年賀状を読むのは1月中旬の校長連絡会で上京した時です。

スマートフォン等の電子機器の普及が加速して、メール、LINEで連絡が取りやすくなった現代ですが、年賀状などの手紙の文化はとても良いものだと感じています。

今年も1月中旬に年賀状を見ていると、毎年、夏合宿に高校生を連れて行っていた新潟苗場の宿の御主人からのものでした。

「今年のお正月は、子供たちも帰ってくるそうです。」と書いてありました。

その宿には、小さなお子さんが3人いました。卓球部の合宿には、決まって宿へのおみやげと3人のお子さんが喜びそうなお菓子を持っていきました。そのお子さんも大きくなって就職をして、今年のお正月は苗場に帰ってくるという内容のものです。懐かしさで宿屋の周りの風景や練習場を思い出しながらしばらくはがきを見ていました。

するとその日の夜、宿屋の夢を見ました。夢というのは、どこか現実離れしていることが多いものです。

私が朝早く宿屋の前でお風呂を掃除していました。玄関前でお風呂の掃除をするなど、おかしい話です。そこへ、神津高校の卓球部の生徒が来て、「おはようございます。先生、散歩に行ってきた良いですか？」と聞くので「おお。行ってこい。島の自然とは違う苗場の景色を味わってこい。」と言って送りだした夢でした。

おかしい夢を見ましたが、日本の文化である手紙のすばらしさを再認識しました。